

責任編集 松田道雄「貝原益軒」中公バックス、日本の名著 14、中央公論社 1973年11月10日刊
を読む

楽訓

—節序—

1. 天地の理法

- (1)一年のうち天地の理法はつねにめぐり、四時に行なわれて、万古以来やむことがない。
- (2)その間、霞かすみのたつのから雪のつもるまで、その景色はおりおりにことなり、また朝夕の景色も日々にことなり、変化してきわまらぬ眺めである。
- (3)天にあって形象かたちをなすのは、日月の輝き、風雨のうるおい、霜雪そうせつのきよらかさ、雲烟のたなびき、すべて天の文様である。
- (4)地にあって形象をつくるのは、山のそばだち、河の流れ、入江のふかさ、海のひろさ、鳥のさえずり、獣の動き、草木の繁茂、すべて地の文様である。
- (5)このように天地のうちに四時が行なわれ、百物の生成のさま、目のまえに満ち満ちて、人の目をよろこばせ、心を感じしめること、これ大いなる楽しみである。
- (6)これを楽しむ人は、眼力をもって境界とし、四時をもってよき時節とする。
- (7)その楽しみは、人間最高の官位にも、万戸を領する王侯の富にもくらべられない。
- (8)よく心をとどめて天地の形象を愛する人は、その楽しみにつきるところを知らぬであろう。

2. 春はまず

- (1)それではここに、天地のうちに満ちた四時の景色のつきるところのない楽しみをかぞえてみよう。
- (2)春はまず一夜のうちにあらたまった新年の朝の空の光、思いなしか旧年とかわってのどかである。
- (3)正月は事のはじめといって、貧しい家にも春盤しゅんばん（立春に御馳走をならべる）などいうものをもうける。
- (4)また、かわらけを出して御神酒おみきをすすめ、最初の勤めに父母にお祝いをいい、つぎにみずから祝い、お客にも御馳走する様子など、つねにかわってめずらしいのもよい。
- (5)時は今、四季のはじめ空の景色もようやくかわり、東風がゆるやかに吹いて氷がとけ、遠い山辺に霞のたなびいていたのがうすれ、さまざまに物がさやかに見えて、冬の空とかわった装いは、まず春のきた明らかなしるしである。
- (6)垣根ごしに見えがくれする残雪のところどころまだらなのにも、去年の冬の名残りが惜しまれる。

3. 待ちわびた梅の香は

- (1)待ちわびた梅の香は百花にさきだつて春の知らせを得てよろこばしい。
- (2)谷を出て高い梢こずえにうつる鶯うぐいすの、春をむかえた声はまだわかい。
- (3)初春はつねの初音に今日あったのが耳に残って恋しいが、花でなくては、まことには解し得まい。
- (4)花を愛し鳥をうらやむのは、これまず春のたまものである。

- (5) これをはじめとして、なおこれからさきはるかに榮えゆく春のゆたかな恵みがたのもしい。
- (6) 千年を経たみどりの松も、ひとしお色をまして、つねに見なれていたのに、めずらしく感じられる。
- (7) 韓文公（韓愈、唐の文章家）が「最も是れ一年に春は好き処」といったのは、早春の景色が一年のうちでことにめずらしくすぐれたためであろう。
- (8) 二月のころから、万物に冬の風情が消え、雲の色はうららかに気色だち、四方の山も霞をこめた装い、ことに夜あけの景色はたとえようもなくおもむきがある。
- (9) 古人が「春は曙」といったのももともとである。
- (10) 日の光は分けへだてをしないから、とるにたらぬ垣根のうちにも冬にかわって輝きはじめ、草木は萌え出てみな色を生じ、花をまつ様子にもなごやかな気配があつてうれしい。
- (11) 日向もようやくのどかになってゆけば、人の動きも去年より余暇を生じて落ち着き、日は長く少年の如く、心は静かに豊かである。
- (12) 海面は陽光輝き、うしろの山もうららかに霞みわたってはるかな遠景である。
- (13) 鐘は夕刻を告げて日はすでに没したが、残光の久しくつづくのは、日が長くなったしるしであろう。
- (14) このころは陽気たちのぼる空に、まことに童たちは紙鳶（たこ）を作り長い糸をつけ、風に任せてはなてば高く舞いあがる。
- (15) それが雲の上まではるかにたなびきたわむれるのを、老いも幼きも空を仰いで見るのも興が深い。
- (16) 野にはまた陽烟というものが霞のように地から立ちのぼっている。
- (17) このかげろうというものを、莊周（莊子）は野馬という。
- (18) 杜甫の詩に「落花遊糸（かげろう）白日静かなり」というのもこれである。
- (19) これは常にはないものであるが、春らしくていい。
- (20) また垣根の草がはやく萌え出るのを見るにつけても、春の気は下から上っていく。
- (21) 陰気・陽気の交替のけじめがたいへんはっきりしている。

4. 花の季節

- (1) 花もだんだんと咲きつづいて、梅花の散ったあと新たに咲くのは、わが国の花ではない中国の桃の花であろう。
- (2) 桃の花の紅の色は、たなびく雲のわきおこる心地である。
- (3) 李の花の白いのは、消えかける雪が梢に残っているのかと見えて美しい。
- (4) 桜の咲きはじめてのこそ、花に心はないけれども人の心を動かし、いうにいわれぬ眺めである。
- (5) これはわが日本で四季の花の多いなかでも、第一の見ものであるから、梅が散ってあとのこの時節では、ほかの花はすべて圧倒される。
- (6) しかし、なん日も待たせ待たせてようやく咲いたのが、見飽きるひまもなく散るのは、またうらめしい。
- (7) 「よしさらば散るまでも見じ山桜花のさかりを面かげにして」といにしえの人の詠んだのも、のちの思い出にしようというのだろう、情趣の深いものがある。
- (8) この頃から春雨がしばしば降るから、わが家の庭の桜はどうだろうと心もとない。
- (9) 柳みどりに花くれないに春の色をえがき出したのは、美しい眺めである。
- (10) 春がようやく深くなると、風はなごやかに日は暖かく、百草は香りを争い、群花は艶を競

う時搏で、いたるところこれすべて春である。

- (11)このような景色にあって人の心も浮き立ち、気のあった友人とつれだって、春をたずねて憧れあるき、終日花を眺めて暮らすのは、目を楽しませ、心を快くするわざである。
- (12)世の中のすぐれて楽しいものの一つであろう。
- (13)心の楽しみを知らぬ人は、ならずものの少年が、わずかの余暇にあわてて行楽するのに似ていると思うべきである。
- (14)「芳草雨後に秀で、好花風裏に香し」というのもこの頃である。
- (15)杜甫の詩に「鶯の歌あたたかにして正にしげし」という。
- (16)陳希夷(陳搏、宋初の道士)が「野花啼鳥一般(一樣)の春」と詠じたのもみなこの時である。
- (17)すこし酒に酔って花の夕映えを見るのも、ことに色が美しい心地がする。
- (18)花にむかって坐り、月を酔って見るの二つをかねた楽しみは、「春宵一刻直千金、花に清香あり、月に陰あり」という詩を思い出させる。
- (19)また「花を惜しんで春起くること早く、月を愛でて夜眠ること遅し」ともいった。古人はこれほど月花を愛したのに、今の人はせっかくの夜の月と花とにそむいて、むなしく寝てしまうのは惜しいことだ。
- (20)また夜の間の風に花がどうなったろうかと思ひもせず朝起きるのがおそいのは、花を惜しまぬ人である。
- (21)この頃は夕ぐれに遠い山辺に煙のたっているのも目につく景物である。
- (22)だから「春は焼痕(山焼きのあと)に入って青し」といい、また「野火は焼きて尽きず、春風の吹きて後生ず」というのも、焼け野の草をうたったのである。古詩に「地塘(池のつみ)春草を生ず」とあるのは、この頃の目前の景色をただありのままにいったのだろう。
- (23)三月も半ばになると、八重山吹が風にひるがえり、井手(京都の南の山吹の名所)のあたりを見る心地がして、にぎわしいから、つい目がはなせず眺めていることが多い。
- (24)春の花の多いなかに、椿の花はほかの花とちがって盛りが長い。
- (25)ことさらに並べて植えた列々椿は、つくづくと見ていてもあきない。
- (26)橋のたもとの薔薇も夏を待つ様子である。
- (27)すべて春の花は、あるいは先立ち、あるいはおくれ、幾度もはじめにかえって、競いあい、おそく早く咲きつづけ、酴醾(蔓生の灌木、花は初夏に咲く)にいたって花が終りになるのは名残り惜しい。
- (28)春の花はどれも、咲きだした色のそれぞれに目を驚かされるが、気ぜわしく早く散ってしまうのはうらめしい。
- (29)九十の春の光は長いが、何くれとまぎらわしく、風雨もまた多かったから、なすことなくはかなく過ぎて、とめようもない春の終りの今日の夕暮れにさえなった。
- (30)花の静かに落ちるたそがれのひと時は、春の名残りがことさらに惜しい。
- (31)蘇子瞻(蘇軾、宋の詩人)が「青春は一夢に還る」といったのはもっともだ。
- (32)仲間のことも、うき世のちりも、わが心のきたなさも、花を見ている間忘れていたのに、今からあとはどうしたものか。
- (33)こういうおりにふれると、ことさら時の早く過ぎて失いやすいことが思い知らされる。
- (34)年老いたから、あと何年春の花にあうだろうかと思うと、春の惜しさはさらに深い。
- (35)せめて樽酒をあおって、残りの春を楽しんでこの憂いを忘れよう。
- (36)すべて春の景色は一年のうちでもっとも艶麗である。

- (37) その美しいさまは、いづくしようもない。
- (38) こういうつたない言葉で、その一端をあらわし得たと思うのも笑止であろう。
- (39) 雨風に花は散ってあともなく、むなしく枝だけが形見となって見えるが、なお春色は空に残っておもかげの去らぬのはおもむきが深い。
- (40) 藤はまた春にひとり立ちおくれ、夏にさきがけて、そばにならぶ花がないからか、それだけに興のある様子、春に別れたもの思いもすこし忘れられる気持がする。

5. 夏の装いがめずらしく

- (1) 惜しんでもとまってくれぬ春が去ってしまうと、呼ばぬのにやってきた夏の装いがめずらしく、今めかしくあらたまった頃、空虚になった地上の気持よいところに、青葉の梢さわやかに、万事春とかわって、また世界がちがってくるありさまなのも、たいへんよろしい。
- (2) 緑の木陰に昼の静けさができるが、さびしくはない。
- (3) しずかに話しあえる友人があれば、春の花盛りにまさって楽しい。
- (4) 時を得て鳴くほととぎすに初音が愛らしく、鶯のなく声のすでに老いたのにかわる心地がする。
- (5) 中国の人はほととぎすの声をきくのをにくんだが、わが日本では昔からこれをあわれんで歌にも多く詠んだ。
- (6) 夜もすがら空にとどろくように鳴きわたるが、聞く人はああやかましいとは思わない。
- (7) あまり鳴かぬ所では、もう一声でも聞きたいと思い、また鳴いていく方の人も待っているだろうと思うと、過ぎていくのも、少しもうらめしくない。
- (8) 卯の花の雪かと思うように垣根に咲くのも、この月の名（四月を卯月という）をひとり占めして、美をもっぱらにするといえよう。
- (9) およそ四月の景色は清くなごやかで、空は晴れ、雨は久しく降らず、余寒はなくなり、日は一層ながく、余暇が多いので、外に出て遊ぶのによい。
- (10) 朝早く起きて庭の様子を見るのにも、風は暖かく気持がいいので、日々見てまわるところが多くなる。
- (11) 草も木もみな緑の色をあらわし、おのおのその趣をなしているのは、天地の恵みをそのままにうけたのだ。
- (12) 動物よりも成長がすなおで、不思議がなく親しみやすい。
- (13) 韓偓（唐の詩人）の詩に「四時最も好きは是れ三月」といったのは、まことにそのとおりである。
- (14) しかし高齢になると、暑さ寒さがいやなので一年のうちでは四月がいちばんいい。
- (15) そのためだろう、明の李夢陽（明の詩人）が「四時の景初夏に如くはなし」といったのも、先輩とはまたかわってたいへんうまくいいあらわしたものだ。
- (16) 四月はこんなに空が晴れているが、五月になると大空の景色がさきごろに引きかえ、梅雨が久しくつづき、朝どきは雷がなくて恐ろしく、雨の降らぬ時も曇って、夜は何も見えぬ闇である。庭の様子を見るひまも少なく、いつも閉じこもって日数がたつのもうとうしい。

6. 夏もようやく深く

- (1) 夏もようやく深くなると、木に繁らない木はなく、草にのびない草はなく、日々にのびるように見えて、どこまでも緑の色の深い夏木立は、花にもおおかた劣らない。春の花は所々に咲いてまばらであるが、夏は山も里も木のある所、草のある所、日に輝いてみな緑であるから、

春とちがった眺めである。

- (2) いろいろの草を植え集めて夏の情感はさらに深い。
- (3) 前裁の草木は雨をうけて、その梢をあらわし、時を得たように存分に繁茂するのもうれしく見える。
- (4) 昔を思い出させる 橘たちばなの花の香りのする夜は、追い風も親しく感じられる。
- (5) 早苗さなえを植える頃は、田家でんかは待っていた雨が降って、いそがしくにぎわしい。
- (6) この頃庭に引き入れた小川のそばにとぶ螢ほたるが音もしないで集まるのを見ると、鳴く虫よりいっそう愛らしい。
- (7) 夏山の景色では、青々として高い連山が雲のそとにそびえ立つのを、心ゆくまで眺めるのは、すぐれて爽快である。
- (8) 白楽天が「眼をほしいままにして青山を見る」といったとおりである。

7. 七月の頃になると

- (1) 七月の頃になると、縁先の風も好ましく、わらの円座を敷いているのも心地よい。
- (2) 池の中央の蓮はすの葉の、濁りにそまず、花もないのに夕風に香ってくるのさえ、ほかの草にすぐれている。
- (3) ことに花卉が微笑するかのようには開いた時は、所せまいほど香りが満ちて、世にくらべるものなく清らかである。
- (4) 涼を追って木陰にやすみ、木々の下風のなつかしいところで、泉の水を手ですくって飲むのは、夏を忘れる気持である。
- (5) すみわたる夜半の月光を清い水にうつしてみるのはいままでもないが、庭に引き入れた小川の音など聞いているのも満ちたりた思いである。
- (6) 連日の暑さにたえがたい時、にわかには夕立がして、あとの名残りの涼しいのも気持がいい。
- (7) 清少納言せいしょうなごんは「夏は夜」といったが、夕方は蚊という虫が人をさすので、年にとっては、とくにたえがたいから、朝の明け方の風の涼しいのがさすがしくて意にかなう。

8. 暮れにくい夏の日

- (1) 「志士は日の短きを惜しむ」と傳玄ふげん（晋の文章家）はいった。それだから「人は皆炎熱に苦しむ。
- (2) 我は夏日の長きを愛す」と柳公権りゅうこうけん（唐の学者・書家）がいったのももつともである。
- (3) 暮れにくい夏の日、学問を学び技芸に努める人のためには、まことに好ましい。
- (4) しかし炎暑の盛んな時は、国中が燃えさかる炉のなかにあるようで、何もしないでも汗がこぼれ落ちるほどで、身の力が弱ってたえがたいから、夏の過ぎていくのは、春秋のしまいや冬の終りに名残りを惜しむのとちがい、水無月みなづきばらい（六月晦日に神社で行なう神事）をする頃になると気持がいい。ただ年の半ばがもう過ぎてしまったことは惜しい。

9. 秋が来ると

- (1) 秋が来ると初風が涼しく吹いて、草木のそよぎ、秋の声がいたるところになびいて聞こえるのは、初春の風とちがって、心をいたませ、身にしみて秋の気の到来が感じられる。
- (2) こおろぎが階下に集まって鳴くのも、季節を知っているように聞こえる。
- (3) 阮籍げんせき（三国時代、魏の人。竹林の七賢の一人）が自分の気持をうたった詩に「開秋は涼気を兆きざし、蟋蟀は床帷こおろぎ（腰掛けにかけた布）に鳴く」といったのも、この頃の景色をいったのである。

- (4) 大暑がようやくしりぞき、新涼が来ると、まるで冷酷な役人が去って、昔からの友人が来てくれたようである。
- (5) この頃は人の気力も回復し、燈火も親しくなるから昔の本をひろげてみるのによく、すべての楽しみにまさって興がふかい。
- (6) 萩^{はぎ}の上を吹く風、萩の下にむすぶ露、さまざまの虫の音、みな秋のあわれをもよおして、身にしむこと限りがない。
- (7) 門のそとの田の稲の葉が朝露にしめり、夕べにおとずれる風にそよぐさま、とくに早稲^{わせ}・晩稲^{おくて}があるいは先だち、あるいはおくれて穂を出すありさまは、みな感にたえぬ。
- (8) 仲秋の頃ともなれば、一年待ってようやく見られた名月は、およそ天地間にくらべるもののない唯一の見ものであるから、すべての美景もその下になろう。
- (9) この夕この景色にあうのは、この世の中のおもしろさもあわれさも尽くしてしまうようなものだ。
- (10) 毎年、一年のうち月ごとに、上弦の月から居待ちの月まで、空が晴れていれば毎夜心を楽しませ、目をよろこばせることは数かぎりない。
- (11) ことさら秋の三ヵ月は、おりおりの美しい光を、年ごとに心ゆくまで見られるのは、まことに幸福の多いこの世である。
- (12) およそ天の下の君は、四方八方をしろしめして、天地はみなその領し給う国のうちではあるが、いやしい私のようなものまで、天にただひとつかかる月を自分のものとして、好きなだけ仰ぎ見るのもありがたいことで、身にあまる幸いである。
- (13) 差別なしにいやしい町も同じように照らしているのはよろしい。
- (14) 年々に月と花とを飽くまで見られるのは、じつに思い出の多いこの世といえよう。
- (15) せっかくの夜の月だから、気心の知れた人といっしょに見たいのだが、そういう友人はめったにいないので、西行法師が「ひとりぞ月は見るべかりける」と詠んだのもよくわかる。
- (16) 中国の人も「秋月は俗士と見るべからず」といった。
- (17) 李白は「今人は古時の月を見ず」といったが、昔、世々の人が眺めたのもこの月であるから、古人の形見となっているのも、昔が思い出されてなつかしい。
- (18) 古今の人の世を去っていくのは、流れの去ってかえらないようなものである。
- (19) ただ月の光だけが昔も今もかわらないのは、この上なく貴重なことと思う。
- (20) 月が梧桐（あおぎり）の上にいたり、風が楊柳（かわやなぎとしだれやなぎ）のあたりを吹くのは、心を洗い興をもよおして、なんともいえぬ気持よい季節である。
- (21) 四季ともに思い出の多いこの世であるが、とりわけ秋の月は、見られないであろうのちの世の光まで思いやられる。
- (22) 秋も半ばをすぎると、大空に初雁^{はつかり}がづらなって鳴きわたるのも、また愛らしい。、花は春というが、秋もまた花は多い。
- (23) ことに野辺に生える秋草の、名も知らぬ花が、たくさん草むらに咲いて、錦^{にしき}をさらすように見えてくると、秋の野はいっそう愛らしい。
- (24) 秋の花がながく咲きつづけるのは、春の花が見るまもなく早く散るのよりいい。
- (25) およそ花のなかできわだっているのは、春は梅・桜・桃・海棠などであるが、それらが木に咲く花であるのは、陽気は先に空にのぼるからであろうか。
- (26) 秋は萩・おみなえし・尾花^{おばな}・葛花^{くずばな}・なでしこ・ふじばかま・あさがおの七種のほか、ききょう・りんどうなど草の花が多い。
- (27) 秋はまず陰気が下へくたるためではないだろうか。

- (28) なでしこは、春は草だけのように見えているが、夏から咲きはじめて秋の色をあらわしてくる。
- (29) 中国や日本のいろいろの花の咲く九月の頃は、秋の花もすぎ、紅葉にもまだ早いのに、菊は百花におくれて咲き、ひとり晩節をたもって、霜にほこるように節操の色をあらわし、すべての花と時がちがうばかりか、色・形・香ともことにすぐれてあでやかであるから、たとえこの時期に花が多くても、とりわけて愛されるにちがいない。
- (30) それが秋の末に菊だけが盛りなのだから、時節ひとえにあって大いによろしい。
- (31) 元稹げんしん（唐の詩人）が菊を詠じて「これ花の中に偏ひとえに菊を愛するにあらず、この花開き尽くして更に花無し」といったのは、菊を愛する心がまだ足りない。
- (32) この花は『万葉集』にのっていないなくて、『古今集』にはうたわれているから、奈良の時代までまだ中国からはいって来なかったのである。
- (33) いまさらむかしを思い出しても、不満で、残念である。
- (34) 屈原くつげん（戦国時代、楚の詩人）が『離騷りそう』で梅のことを書き忘れたのと同じようなものであろう。
- (35) 杜甫が海棠を詠じなかったのは、礼儀にかなっているから、それはそれでいい。菊は上品で世俗ばなれした花のためか、これを好む人は少ない。
- (36) 牡丹ぼたんは富貴な花なので、近ごろの世俗がますます熱心になるのは、もっともなことだ。
- (37) 欧陽子おうようし（欧陽修のこと。宋の文学者）が、「人の心はそのこのむところを以て知るべし」といったのは、まことに当然である。

10. 花の数

- (1) およそ一年のうち、梅の咲きはじめから菊にうつるまで、いろいろの花の盛りにあってきて、なじんで見た花は数が知れない。
- (2) この季節々々の楽しみも思い出が少なくない。

11. 秋は空が清く

- (1) 秋は陰気の生じるはじめなので、空が清くすみわたり、高くほがらかで、月日の光が明らかである。四方をかえりみると、茫々ぼうぼうとしてひろく、風は肌に涼しく吹き、その景色は人の心に深くしみいって感じられる。
- (2) 「春はただ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる」と詠んだのも、秋になってみるとなるほどと思われる。

12. 秋の日の妙なる

- (1) 陳眉公ちんびこう（陳繼儒、明の文人）が「世の人はみな秋月をめでて、秋の日の妙なるを知らず」といった。このことは世の人も気がつかなかったのだが、自分もそういわれてみると、いかにもそうだと思ひあたる。
- (2) 気をつけて秋の陽光が草木に輝く清楚な美しさを知るがいい。
- (3) 未ひつじの刻の後半（午後二時から三時）あたりから、その景色はますます美しく、ことに夕陽ゆうひが西にかたむいて山に入り、海に沈もうとするのは、世にたぐいない、えもいわれぬ眺めである。
- (4) 日と月とは大空にならぶ光であるから、万物にすぐれているのも当然である。

13. 秋はまた夕暮れの

- (1) 秋はまた夕暮れの景色が非常にいい。
- (2) うす霧の籬まがきに立ちのぼるよそおい、風の音、虫の音、どれも人の心にしみて春にもましてあわれが深い。
- (3) 秋は夕と誰でもいいたくなる。
- (4) 夜が長いから暁の鐘は人をおどろかしやすく、ねざめがちである。
- (5) ことさら老いの眠りは早くさめて、いつも夜を残しているので、ねられないままに懐古の心がおこり、来し方行く末のことが思いつづけられる。年をとるとつねに昔のことばかりがなつかしい。

14. 春か秋か

- (1) 中国の人は一年のうちでとくに春を愛し、文章にも春を賞した言葉が多い。
- (2) わが国の人は昔から秋に心をひかれる。
- (3) どちらがよいか、昔のわが国の人は本にも多く書いている。
- (4) 春秋の理は陰陽を異にするが、その景色はどちらもすぐれてよいから、この争いは賢人や哲人でもきめにくいだろう。
- (5) まして人の心はその顔つきのようにちがっているから、性分の好みで、春秋の優劣があるだろう。私のようなものの心は、時によって移っていくから、どちらがまさっているときめられない。
- (6) 花と紅葉の散っているのも、どっちのほうが惜しいとはいえない。

15. 九月の末になると

- (1) 九月の末になると、秋の花はみなおとろえ、虫の音も鳴き枯れて、紅葉がようやく色づいてくるので、秋の暮れゆく思いもまた深い。
- (2) 秋はもう今日ばかりだと眺めるのも、いたく名残り惜しい。
- (3) 春の終りにくらべると、草も木もようやく枯れはてて、これからどんな景色になろうかと思いやられてさびしい。

16. 冬も近づいて

- (1) 冬も近づいて、今日から火をいれた火鉢もだんだんと離れにくくなる。
- (2) 露と霜とがおきかわり、木々の梢の紅葉も色こく、まばらに萱かやの生えた原も冬枯れの景色となって様相しぐれのかわるのも、秋とちがった眺めである。
- (3) 十月の時雨もすぎて、日があたたかだと、ちょっと春になったような心地がする。
- (4) この月を小春といったのももっともである。
- (5) しかし十一日、二十一日と一いつくのつく日がかさなっていくと、風はいよいよはげしく、木の葉が降り、山があらわに見え、松だけが峰に残るのもさびしい。
- (6) 春・夏・秋のあでやかな景色、装っていた様子が、皆この時にいたって尽きるのだから、山の空もこんなにかわったかと驚かれる。
- (7) 数日来の雪のつもった壮大な朝は、山も里もひたすら銀世界になって、世界がかわったようである。
- (8) 冬ごもりしていた梢の枯れたのがふたたび花が咲いたようである。
- (9) ことさら冬の夜のすみきった月に、雪を反映した空は、見る人もなく、ひとり身にしみてあ

われも深い。

- (10)空がはれたあとは、友を待つ様子で、ところどころ消えのこったまだら雪も心にくい。こういう時、何もすることがなく、ふところ手をしていらだっている人はわびしく見える。
- (11)埋み火にむかって、書をひもどくことを日課にしている人は、楽しみが深いことだろう。
- (12)万事、年に先だって早く計画をたてるがよい。
- (13)若い時につとめて書を読み習っておけば、こういう時もわびしくないだろう。

17. 冬の末にもなると

- (1)冬の末にもなると、今年の日数も残り少なく、^{こよみ}暦の軸も見えてきて、春はすぐ隣りまできている。
- (2)年の終るのは惜しむべく、歳のかさなるのはなげかわしいが、新しい年をむかえるのは、めでたいことであるから、よろこぶべきだろう。
- (3)この頃、世の中の人は何くれといそがしそうに落ち着かず、大声をあげて走りまわっているのが多いのを、ひとり静かに見る人は楽しかろう。
- (4)一年がはかない夢の心地で過ぎたのだから、あとをかえりみて、切に名残りを惜しむがよい。
- (5)老いの身は、月日もますますたちやすい。
- (6)何ということもせずまたひとつ歳をとったのがうらめしい。
- (7)しかし人のこの世に生きるのは、思いがけない異変の多いことなのに、一年のうちに不幸なくすごせた人は、また楽しいではないか。
- (8)春秋の暮れていくのさえ名残り惜しいのに、まして一年の終りの今日の夕暮になったのは、実に名残り惜しい。
- (9)中国の人は「歳を守る」といってこの夜は一晩中寝なかったという。
- (10)これは古いものを送って新しいものを迎える心であろう。
- (11)送り迎えについて、喜びと悲しみとがひとかたでなく、四季のうつりかわりに、感をおこす人は感情がゆたかなのである。
- (12)あわれを感じずる人はこれによって悲しみ、道理に通じた人はこれによって楽しむのである。
- (13)景色は同じだが、ただ見る人により艶にも^{えん}凄くも^{すご}思われるのだろう。

18. 無為の季節に見えるが

- (1)一年を全体として考えると、春は陽気がはじめてのぼり万物が生じる。
- (2)空の景色ものどかで、人の心もうららかでにぎわう。
- (3)夏は陽気がことごとくのぼり、宇宙にあまねく満ち、天地が交わって草木がしげり万物が成長する。
- (4)秋は陽気がはじめてくだり、陰気がのぼり、万物はおさまり、景色がきれいで人の心にしみて感じる事が深い。春に対して表裏をなすものである。
- (5)冬は陽気がことごとくくだり、陰気もっぱらで万物はかくれる。夏に対して表裏となっている。
- (6)およそ一年がめぐって、冬にいたって天地が交わらず、閉じふさがって、物はかかれてしまう。
- (7)春は生じ、夏は長じ、秋はおさめるというような作業が冬にはなく、月日はうつろっていく。
- (8)冬は美景もなく、四季のうちで無為の季節に見えるが、じつは春・夏・秋の美景を生んだ作業が、この時に停止して、一年の大功を終えて、残った元気をふかく貯蔵して来たるべき春の

もととしているのだ。

(9)その理をふくんでいるのがこの季節である。

(10)だから冬、気が一すじに閉じかくれて無為に見えるのは、一年の成功の終りであるだけでなく、また来る年の発生の恵みをふくんでいるのだから、始めになっているともいえよう。

(11)人が毎晩ねむって、気がしずまるのは一日の疲れをいたわりやすめ、明日の労働の力のもとになっている。

(12)もし夜によくねむらないと、今日の疲れをやすめられず、明日のはたらきに力が出ないようなものである。

(13)冬にあっては人も天の時にしたがって、静かに精神を養うがよい。

19. 天道の誠

すべて一年のうち、月日がめぐり、四季がうつり、百物が生じるのが、毎年ちがわず、万古から来世までかわらないのは、天道の誠のなし給うことで尊ばねばならぬ。静かな生活をしてこれを感じる人は、その楽しみはふかかろう。もしこの理を知っている人は、道を知っている人であろう。

20. 人の一生

(1)時節は目に見えて早くたつというのでもないが、日数がかさなっていくと、一年の過ぎるのはすぐだ。

(2)人の一生を経るのも、年がだんだんとかさなると、老死にいたるはほど遠くない。

(3)まして人の命は、いたってあやうく、朝に夕を知るよしもない。

(4)少壮の人が老大の人に先だつことも多いから、あてにならない。

(5)久しくないうき世に、時のうつっていくことが早いのだから、あたら時日をむなしく過ごしてはならぬ。

P257 ~ 268

<コメント>

貝原益軒の「幻の名著」で、京都の町医者松田道雄先生の名現代語訳の「楽訓」の「巻中」第2章。移り行く四季の自然を楽しみながら、一人ひとりが人生を大切に生きるにはどうしたらよいかを、この「楽訓」の第2章は教えてくれる。貝原益軒との「時空を超えた対話」を、松田道雄先生の名訳でじっくりとお楽しみください。

2021年10月26日(月) 林明夫